

Title	運定め話の系譜：因縁話の成立
Sub Title	
Author	川添, 裕希(Kawazoe, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1989
Jtitle	三田國文 No.12 (1989. 12) ,p.25- 30
JaLC DOI	10.14991/002.19891200-0025
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19891200-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

運定め話の系譜——因縁話の成立——

川添 裕希

一

前稿では、神話・伝説とは異なる昔話の想像力の営みを問題とし、富の観念や異界についての考え方などに昔話独自のものが見られることを指摘した。⁽¹⁾すなわち、昔話においては、獲得される富は共同体全体の永続的なものでなく個人的なものに変わっている。それに応じて、富をもたらず存在についても超自然の存在でなくなり、富がもたらされる期日も限定がなくなっている。また、一方では、富のありかとしての異界を、はるかに離れた場所でなく、境界的な場所に想像を働かせて作り出すなど、昔話独自の想像力も見られるのである。

ところで、昔話の中には、因縁話や化物話のように短いものがあり、柳田国男の昔話の分類では派生昔話の中に入れられている。これらの話は極端に短く継起的構造も単純で、現実と密着していて伝説的である。柳田国男は、こうした昔話を、異常なる主人公の誕生から財宝の獲得や幸福な婚姻に至る一代記風の完形昔話からの派生と考えている。⁽²⁾しかし、そうした歴史的先後関係を立証するのは難

しいことであり、まずその両者の質の違いをもっと分析しなければならない。こうした因縁話には完形昔話に働いたのと異なる想像力が働いているのだろうか。ここでは、前稿の補足として、因縁話の一つである運定め話をとりあげて、こうした問題について考察したいと思う。

二

運定め話に関して、『日本昔話名彙』や『日本昔話集成』では、これを「男女の福分」型・「蛇と手斧」型・「水の神」型の三つに分けている。さらに、『日本昔話大成』で新話型に入れられている「夫婦の縁」の話型を加えて、大島建彦はこれを四つに分類している。A類が「男女の福分」型、B類が「蛇と手斧」型、C類が「水の神」型、D類が「夫婦の縁」型に相当する。⁽³⁾この論稿では、便宜上この分類に沿って論を進めて行きたいと思う。

A類・B類・C類に共通する事は、生まれ子の運命について神が話し合うのを聞くことである。易者から生まれる子の運について聞くというものもあるが、それは崩れた形であらう。神の話を聞く場

所は、村のお宮やお堂、地蔵の傍、大木の洞などで、南西諸島では海岸で寄木を枕にする場合もある。訪れて来る神は、山の神や箒神などの産の神や道祖神で、南西諸島ではニライの神である。話を聞く人は、その生まれる子の親に当たる人の場合と、狩人や六部や乞食や旅の男などの場合とがある。

A類の話では、運命の内容は、新しく生まれる男の子は不運であり、一方女の子の方は幸運であるということである。男子の方は青竹3本の運、女子の方は粟1石とか塩1升の運などと語られる。男子の親のはからいで成長して二人は結婚するが、男の方から妻を追いついてしまう。しかし、追い出された女は良縁を得て長者の妻に納まる。「炭焼長者」の話と結合して、炭焼きの男と結ばれる場合が多い。一方、男は以前の妻と別れて財産を失い、ざる・箕・竹細工売り、桶屋や乞食などになって以前の妻の所に来る。それに対して、女が同情して握り飯や味噌に小判を入れて与えるが、それに対して、男が同情的で夫はそれを捨ててしまう。あるいは、以前の妻と再会して自分の貧乏な境遇を恥じて死に、それがかまど神のまつりのいわれと結びつけて語られたり、南西諸島では煙草の起源と結びつけて語られる場合もある。

B類では、生まれる子はすべて男子であり、運命の内容は、成長して大工になるが15・18歳など若い年齢で死ぬということである。そして、それは、蛇や蜂などの虫を手斧やのみやかんななどの刃物で追い払おうとして間違つて自分の体を刺して死ぬという事によって現実化する。話はすべて死でもって終わっている。

C類では、運命の内容は、3・5・7・13歳などごく幼い年齢で、水によって死ぬということである。これは、結末によってさら

に二つの型に分けられる。C型は、死ぬ運命の日が3月3日・5月5日・7月7日・12月1日などの行事の日で、その日に餅やぼた餅などの食物をふるまうて水の神や河童に命をとられないですむというものである。12月1日の川浸りのぼた餅や五月節句のちまきなどの晴れの日の食物のいわれを説く場合が多い。一方、C²型は、結末が、水によってではなく、波に千鳥や水玉模様ののれんや唐紙にまかれたり、水という文字がしるされた本の上に伏したりして死ぬというものである。

D類では、神の話を聞くのは若者で旅僧や大工とも伝えられる。十月に出雲の神が縁結びを行うのを聞くという例もある。運命の内容は、その男がその夜に生まれた女の子と結婚することである。そこで、その女の子を殺そうと頭や首や喉を傷つけるが、殺すまでは至らない。後に長い年月がたって一人の女と結婚し、体に傷があるので問いただすと、かつて自分が傷つけたものであることがわかるというものである。

その他、奄美諸島に分布している話で、大雨に降りこめられて岩崩れに合つて死ぬという運命の娘が、嫁に行く途中に大雨が降つても父親が岩蔭で雨宿りさせないようにして助かるというものもあるが、内容的にはC類のC¹型に入るだろう。また、明らかに大陸から伝播したと思われる話で、占師や僧によって短命だと予言された子供が、山上で碁を打っていたり計算をしていたりする神（中国・朝鮮では北斗七星）に食物をふるまうて長命にしてみようという「子供の寿命」の話もある。⁽⁴⁾これも外国種であるが、内容的にはC類のC¹型と同一である。

三

それでは、こうした運定め話は、いわゆる本格昔話とどのように異なるのだろうか。まず、発端の神の話を書く部分を取りあげてみよう。神の話を書く時刻は夜であり、場所はお宮やお堂である。福島県の羽山ごもりの事例などから想像されるように、古く神の託宣を聞くのは特別の祭の日であり、聞く者は精進潔斎をして、夜間に神聖な場所で神の話を書いたのである。⁽⁵⁾夜間に神聖な場所で行われるという点では、運定め話もこうした伝統的な習俗を踏まえていると言えよう。しかし、運定め話の場合には、もはや季節的限定はなくなり、神の話を書く者も前もって潔斎をして備えているのでなく、偶然に聞くのである。さらに、神の話の内容も、集落全体にかかわることなく個人の運命に関することであり、それに応じて運定めをする神も、氏神でなく産の神や道祖神など周縁的な存在になっている。そこには、前稿で指摘したのと同様な昔話独自の想像力が見られる。

次に、それぞれの話型ごとに、その後の話の展開の部分を分析してみよう。まず、本格昔話に一番近いのがA類の「男女の福分」の話である。女性の側から見ると、夫から追放されるという欠乏状況から、他の男と再婚して裕福になるという幸福な婚姻に至るのであるから、これは「一寸法師」などの本格昔話の主人公の場合と話の構造は同一である。ただ、本格昔話の主人公の場合には、その発端で神の申し子であるとか瓜から生まれるなどというような超自然的な出生が語られるが、ここでは神によって福分が与えられるという形に変わっているわけである。このように女性の方が神から福分を

与えられた超自然的な女性だと解釈すると、男性の側から見ると、超自然の女房を追いつ出して裕福でなくなるのだから、これは異類女房譚と同一の構造になる。

ところで、運定めのA類の話と「炭焼長者」の昔話の再婚型との同一性が指摘されている。「炭焼長者」の昔話とはどういうものかと言うと、単純な構造の初婚型の方で説明すると、良縁のない高貴な身分の娘が神の告げに従って山奥の炭焼きと結婚する話である。食物がないので妻は夫の炭焼に金を与えて買物にやると、途中で夫は鴨などの水鳥に小判を投げつけて何も買わないで帰ってくる。妻が金であると教えると炭焼はそんなものは炭がまの所にいくらでもあると言うので、行って黄金を拾い長者になるというものである。これが初婚型であるが、再婚型は、独身の娘の話でなく、前に夫が妻を追いつた話が加わり、また後の方に先夫との再会、先夫が恥じて死ぬという話が加わったものである。一見すると、初婚型が先にある、再婚型はそれが発展して尾ひれがついたものと考えられるが、必ずしもそうとは言えないように思う。

柳田国男は、「炭焼長者」の昔話を漂泊する鋳物師・鍛冶屋が伝播したものであると考え、豊後の八幡信仰とかかわらせて考えている。⁽⁶⁾とにかく、この話の中心が、自然を火によって人間に役立つ金属などの富の形に変える鍛冶屋の呪力にあることは間違いないであろう。しかし、前近代社会においては、人間は自然から無制限に富を獲得することはできず、前々稿の異類女房譚の考察で指摘したように、そこには人間と自然とのバランスが働いていると考えられている。⁽⁷⁾そこで、注目すべきは、B類の話の結末で、先夫が恥じて死んでかまど神になったとか煙草になったと語られている部分である。

女が炭焼と結婚して富を得る代償に、男の貧乏、死が語られるわけであり、自然と人間とのバランスが保たれている。そして、そこには自然と人間を媒介して自然を人間に有効なものに変える役割をもつ火が介在している。こうした富と火と死の組合せは、大歳の晩に火を消した女が死体を預りその死体が黄金に変化するという「大歳の火」の昔話にも見られる。また、それは鍛冶が死の忌を嫌わないという信仰にもつながってくる。そうすると、運定め話のA類の話や「炭焼長者」の再婚型の話は、人間と自然とのバランスの思考が現れているという点で、本来の昔話のあり方を示していると言えよう。それに対して、「炭焼長者」の初婚型の話は、小判を石のように扱って水鳥に投げつけるというような炭焼の反文化的行動に心が集まってしまった結果、本来の構造を失ってしまったという風に解釈できるだろう。

それでは、本格昔話的なきちんとした構造をもったこのA類の昔話において、発端の神の運定め部分はどのような役割を果たしているのだろうか。これは、構造的に他の部分と緊密に結びついて叙述を形づくるというのではなく、主人公の運命を先取りし主人公に超自然的な属性を付与しているだけなのであり、あくまで副次的なものである。それが証拠に、この発端の部分がない話が、「炭焼長者」の再婚型の話として存在しているのである。

次に、C類の「水の神」型の話の中のC1型をとりあげよう。これは、「食わず女房」や「牛方山姥」の話のような本格昔話の中の逃竄譚と構造は同一である。ここでは、逃竄譚の山姥や鬼女に当たるものが水の神に命をとられることに相当し、そこからのがれることに話の中心がある。また、「食わず女房」の話が五月節句の由来と

結びつくように、ここでも三月や五月の節句、12月1日の川浸りの日などの年中行事の由来と結びついていて、そこにも共通点がある。しかし、この話の場合には、逃竄譚で山姥が追ってくるのをのがれることに比べれば、水辺で何げなく命を狙っている水の神には恐怖感や緊迫感が欠けている。これが話として成り立つためには、災厄が容易にのがれられないものでなければならぬのであり、それを補うのが、この話では水の神に命をとられるという運命の予告になっているわけである。しかし、それは抽象的なものであり、山姥の持っている具体的な恐ろしいイメージとはかけ離れたものになってしまう。

次に、B類の「蛇と手斧」型の話を取りあげよう。この場合には、本格昔話と異なり、予告された運命通りに実現し死ぬという不幸な結末で終わっている。不幸な結末が生まれる時にすでに予告されていたという因縁話になっているわけである。しかし、全くそこには本格昔話と何のつながりもないと言うわけではない。死の運命が前もって予告されていたと言うのなら、死の原因は何でもよいはずであるが、ここでは大工のみで蜂や蛇を突くことによって死が実現している。柳田国男が指摘しているように、「夢買長者」「薬しべ長者」「蜂の助言」などの話では、蜂が富を得るきっかけになっており、そこに蜂に対する民間信仰が反映している。⁽¹⁰⁾ここで死の原因として蜂が登場するのは、こうした本格昔話に見られる蜂についての民間信仰の系譜をひいているからである。また、大工が登場するのは、奄美大島の大工の神からうかがわれるように、鍛冶屋と同様に大工が呪術をもった特殊な職能者と考えられていたからである。⁽¹¹⁾しかし、こうした本格昔話の系譜をひきながら、話の中心にな

っているのは個人の運命とそれを予言した人への関心である。そこには何らかの形で宗教者の働きかけが考えられる。

次に、C類の「水の神型」の話のC₂型の方をとりあげる。この場合にも、B類と同じように予言された運命が実現して死ぬという不幸な結末で終わっている。その死の原因は、水によって死ぬという運命の予言で水に十分注意していたにもかかわらず、水の模様のれんや唐紙、水という文字をしるした書物によって死ぬのである。それは、「水」という語が具体的な水という実物以外に絵とか文字とかさまざまな代替物によって置き換えられることから起こったものである。そこでは、語とそれに対応する現実のイメージが多義的になっていると言えよう。これは、笑話の世界に見られるものである。たとえば、嫁に行く娘が鶯のように美しい声で話すように教えられて本物の鶯のまねをしたという「鶯言葉」の話がよい例だろう。そのために、このC₂型の話の場合、死という運命の実現の話であるにもかかわらず、何か滑穏さが感じられるのである。これは、C₁型の話を裏返ししておかしさを出したようでもあり、C₁型よりもさらに新しいものであろう。

最後に、D類の「夫婦の縁」の話を取りあげよう。この場合には、予言された運命は結婚の予言である。しかも、それは本格昔話の結末に見られる幸福な婚姻ではない。男は生まれたばかりの女子と結婚するのがいやで、その女子を殺害しようとしているのである。また、これまでの話と異なり、女子の方は生まれたばかりの子であるが、男子の方はすでに成人に達した年齢である。結局、話の中心は、予言された通りに事態が進行して、男がその女子と結婚し、それを男が女子をかつて傷つけた傷痕によって確認するという

ものである。運命通りに事態が進行する点では、この話はB類やC類のC₂型と共通であり、因縁話になっている。ここでは、それを男が女子を傷つけることによって残った傷痕によって事実譚らしくしているのである。

四

こうして運定め話を一通り見てきたわけだが、一口に運定め話といっても、本格昔話に近いものから、本格昔話から脱して完全に因縁話になってしまったものまで、幾つかの型があった。ちなみに、現在採集されている昔話の数言うところ、圧倒的に多いのがB類とC類で、C類の中ではC₁型よりC₂型の方が多い。こうしたことは、運定め話が本格昔話の中の単なる一要素から出発して、独立した因縁話へと成長していく過程を示しているように思われる。

しかし、本格昔話の一部が脱落して因縁話になったというのではない。本来の昔話というものは、神話・伝説にも通じる人間と自然とのバランスの感覚を基盤にして、それに昔話特有の想像力を働かせて、現実から離れた物語的継起構造を形づくったものである。昔話の関心は、そうして虚構された筋の構造にある。一方、因縁話の関心は現実の人間の運命の不思議さにあり、昔話とは関心が異なるわけであり、きわめて単純な構造しかもっていない。しかし、こうした運定め話のような因縁話が伝説ではなく虚構された話として成り立つためには、本稿で分析したように、どうしても昔話特有の想像力を借りてこななければならない。因縁話が本格昔話から成長したというのは、形の上のことではなく、本格昔話を本格昔話たらしめている昔話特有の想像力があって始めて因縁話も話として定着した

ということである。こうした所に、運定め話が、昔話の枠内にとどまって、現実の人間社会の不思議さに対応できず、きわめて類型的なものしか生まれなかった原因があるのだろう。

注

- 1 拙稿「昔話に見られる想像力―客人款待伝説から隣の爺型の昔話へ―」(『三田国文』第八号所収、昭和62年)
- 2 柳田国男『口承文芸史考』(昭和22年、『定本柳田国男集』第六卷所収、中央公論社)
- 3 大島建彦「民間説話の系譜」(『日本の説話』4所収。東京美術、昭和48年)
- 4 丸山顕徳「子供の寿命」(『日本昔話研究集成』4所収。名著出版、昭和59年)
- 5 福島県の羽山信仰については、岩崎敏夫『本邦小祠の研究』、昭和38年。
- 6 柳田国男『海南小説』「炭焼小五郎の事」(『定本柳田国男集』第一卷所収)
- 7 拙稿「昔話の叙述の展開とその構造―異類女房譚を例として―」(『三田国文』六号所収、昭和61年)
- 8 福田晃「声刈説話伝承論序説」(『口承文芸の展開』上所収、桜楓社、昭和50年) 火のもつイメージについては、飯島吉晴『竜神と廁神』、人文書院、昭和61年。
- 9 石塚尊俊『鏝と鍛冶』、岩崎美術社、昭和47年。
- 10 柳田国男『昔話と文学』(『蘆しべ長者と蜂』(『定本柳田国男集』第六卷所収)
- 11 奄美の大工神については、小野重朗『民俗神の系譜』、法政大学出版局、昭和56年。拙稿「民俗神の諸相」(『総合研究奄美伝統文化の変容過程』所収、国書刊行会、平成元年)

(かわぞえ ひろき)